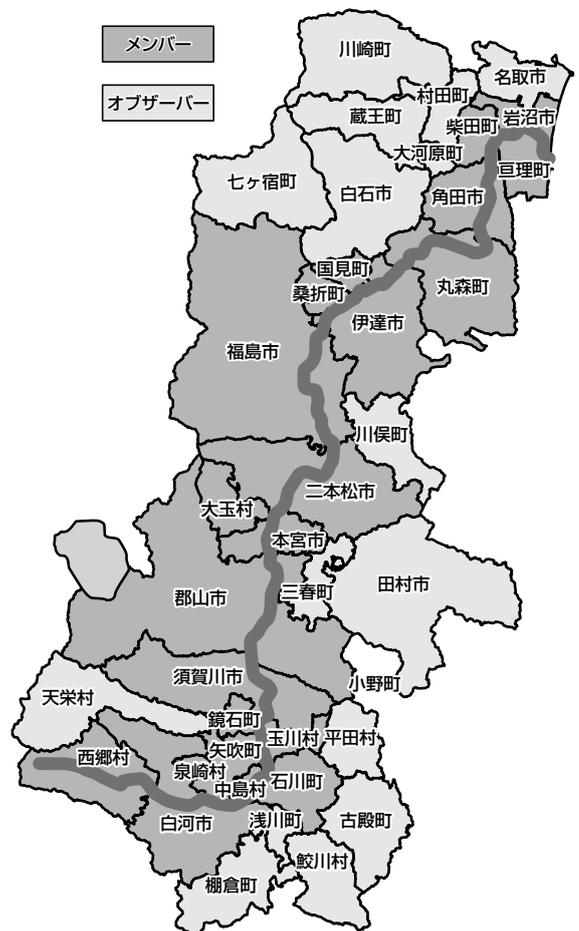


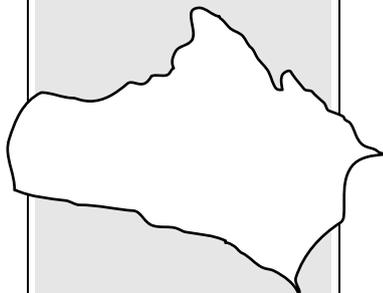
第3章 阿武隈川の絆



西郷村



西郷村長
佐藤 正博



面積 192.32km²
人口 19,765人
(H26・9・1 現在)



▲熊の滑り台

●阿武隈川と西郷村

江戸時代の白河藩主松平定信公は彼の著書「関の秋風」に「白川へ至りてかしの山見ざらんは、孔子の門過ぎてはいらざるが如し、かしの山へ至りて楓葉の風色見ざらんは、堂に至りて、室に入らざるが如し」と記しています。

その甲子の奥深く那須山系三本槍岳に源を発する阿武隈川は、「甲子に88の瀧あり。」といわれるように雄瀧・雌瀧に代表される無数の瀧と警告を有し、ブナの原生林におおわれた未開の自然が残されており、これらは村の誇るべき景勝地であります。村の中央を流れる阿武隈川は、真名子川、千歳川、鳥首川を支流とし、谷津田川は白河市搦目、また堀川は同市金勝寺付近でそれぞれ合流し、河川としての様相を整えはるか200kmに及ぶ太平洋へと旅立ちます。

往古から水資源に恵まれた本村には今なお、阿武隈川の恩恵を受けない広大な未墾地が残っていました。明治10年代から開墾が始まり、阿武隈川からの取水により村の中央部はうるおい、数度にわたる大水害にもめげず健全な集落を形成していき、現在の村の中心地の基礎をなしました。

このように阿武隈川は、米が主産物であった当時からわが村にとっては、恵みの川でありました。

●取り組みの現状

治水関連

本村は阿武隈川上流域のため、明治から昭和にかけて7回洪水に遭っているが、大工事の記録がないことから、災害復旧の応急処置程度しか施されなかったと思われまます。村内の河川改修が本格的に行われたのは阿武隈川が1級河川に指定された昭和41年以降であります。

平成10年には、阿武隈川支流の堀川に砂防環境西部事業等により、地域住民や堀川両岸にある社会福祉施設であります「太陽の国」に入所されている方々等が、共に緑豊かな溪流に親しめるように、上流部を浸水・レクリエーションゾーン、下流部を散策ゾーンにわけて整備され、本村発の親水公園が完成しました。

また、同じ堀川に昭和62年度から洪水調節、不特定用水、上水道用水と、利水、治水の両面を兼ね備えた多目的ダム「堀川ダム」が建設されています。

利水関連

本村に於いては豊富な水資源に恵まれているため、上水道、工業用水の利水はほとんどなく、農業用水の利水のみであります。特に緊急の課題はないように思われます。

水質保全

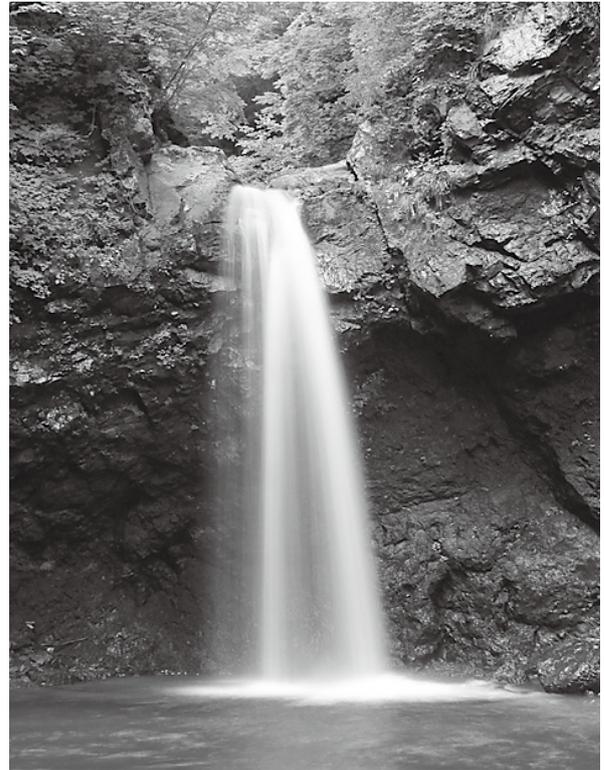
本村は、阿武隈川の最上流であることから、水質保全については常に関心事とするところであります。

水や環境を守る大切さを子供たちに理解してもらうため、平成3年から源流の里推進事業としてイワナ、ヤマメの稚魚を阿武隈川本流、支流合わせて6箇所へ放流しています。

排水処理施設につきましても、公共下水道、農業集落排水事業等を積極的に推進し、さらにこれら事業で対応でき



▲雄滝



▲雌滝

ない地区について、平成6年度より合併処理浄化槽設置事業に取り組んでいるところであります。

公共下水道事業は、昭和62年度から事業に着手し、平成6年2月に一部供用開始をいたすことができました。また、農業集落排水事業も平成6年度から着手しています。

●今後の課題

治水関連

近年、河川環境に対する住民の関心は極めて高くなってきています。自然が良好な状態で残されている河川が、改修によりコンクリートブロックの護岸等で人工的になり、河川の生態系が破壊されて、魚の住めない河川が増えているところ です。

今後の河川改修にあたっては、災害防災及び利水機能の増進を図るとともに、魚の生態にも配慮したやさしい川づくり、町づくりと一体となった水辺空間の整備を期待するものであります。

水質保全

排水処理施設が村一円に普及するまでには長い歳月を要します。現在の水質を低下させないために、汚染の一番の原因である生活排水等の処理について啓蒙を推進し指導にあたりると共に、より住民の理解を深め意識の向上を図っていく必要があると思います。

●未来へのメッセージ

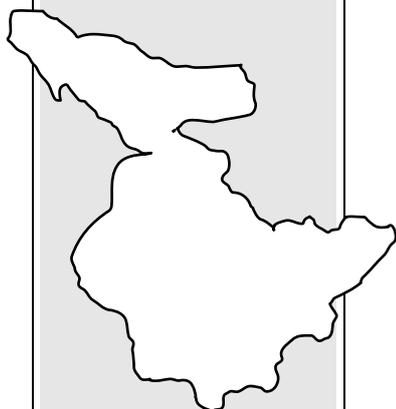
宣言 阿武隈川源流の緑を清らかな流れを保全します。

わが西郷村は、緑豊かな自然環境に恵まれた“さわやか高原都市・にしごう”として、阿武隈川の源流である白河甲子高原の雄大な自然につつまれ、美しい四季の風景を描き出してくれる山々の緑と清らかな流れを次の世代につたえるため、貴重な緑資源と恵まれた水資源を大切にまもり、今後とも森林のもつ保全機能の向上に、その価値を十分に認識し、積極的な維持・保全に努めます。

白河市



白河市長
鈴木 和夫



面積 305.30km²
人口 62,700人
(H26・9・1 現在)



▲谷津田川

●白河市と阿武隈川

みちのくの表玄関である白河市は、歌枕で名高い白河の関をはじめ、白河藩主松平定信が士民共楽の場として築造した日本最古の公園といわれる南湖公園などを有しており、那須連峰を望む福島県南部に位置しています。また、市の中心部では、阿武隈川に沿って東西に市街地が広がっています。

白河市を流れる阿武隈川は途中、堀川や谷津田川などと合流し、古くから生活用水や農業用水、川遊びなどを通じて人々と深い関わりを持ってきました。また、多くの先人達の治水事業などの努力により、現在の流域が形成されています。

現在の白河市は、東北自動車道や東北新幹線などの高速交通体系に加え、首都圏に近接する立地条件や地盤が固く、良質で豊富な水資源に恵まれるなどの地域特性を生かし、製造業を中心に様々な企業活動が展開されています。さらに、郊外型の大規模ショッピングセンターが相次いで建設されるなど、衣・食・住が充実した暮らしやすい生活環境が形成されています。

また、南北朝時代に築かれたのが始まりとされる小峰城や権太倉山の麓にある巨石で源義経が名づけたとされる聖ヶ岩、国内唯一の水河期の残存植物といわれるジャコイの自生地のほか、日本三大提灯まつりの一つに数えられる白河提灯まつりなど、豊かな自然や多くの歴史的・文化的遺産が現代へと受け継がれています。

●取り組みの現状

白河市の治水事業は、文献によると天文3年（1553年）に現在の板橋地区より堰上げしたことが始まりといわれています。本格的な阿武隈川河川改修は、大正14年に白河土木監督事務所が白河市に設置されてからです。

白河市は那須山脈の阿武隈水系の源、甲子山麓の丘陵地帯で標高は360mと高く、地形的に水害の少ない地域です。しかし、昭和の高度成長期には全国的に見受けられたように、森林伐採や大規模な開発等が進められたことにより、降雨時には短時間の内に河川の流量が増大する状況にあったことから国や県による河川護岸整備事業により災害の防止や利水機能の強化が図られました。

現在では、白河市環境美化運動連絡協議会を始めとする各種団体が県の「うつくしまの川サポート制度合意団体」として、地域住民と行政による連携・協働を基調とした河川の清掃活動や美化活動を行っています。また、阿武隈川の市内支流である谷津田川や堀川では毎年4月から11月までの期間において、20団体

を超える町内会による河川清掃が実施されるなど、河川愛護活動が広がりを見せています。現在ではこうした地域住民を始めとする多くの方々の活動が実を結び、各河川において人々が散策する姿が見られるなど、多くの市民にとって憩いの場所となっています。

●今後の課題

阿武隈川流域は、平成10年8月の豪雨により甚大な被害を受け、特に市街地の中心を流れる阿武隈川水系の谷津



▲白河市内を流れる阿武隈川

田川においては、「まちづくりの中で河川がどのような役割を果たしていくべきか」という観点から整備が進められました。

現在では、当時の被害の面影もなく、穏やかな姿で静かに流れています。しかしながら、河川を取り巻く状況は都市化の発達や生活様式の多様化に伴い、生活排水を含む河川環境の保全を始めとする様々な課題に直面しています。中でも、河川や河川敷への不法投棄は頭を悩ます問題の一つとなっています。白河市においても谷津田川を含めた各河川において、一部の心ない人々による不法投棄によって河川の景観や環境が損なわれてしまっている現状があります。今後こうした状況を改善していくためには、これらの問題を真剣に捉え、行政と市民が互いに協力し合うことが最良の策であることは言うまでもありません。不法投棄されたごみを撤去、清掃していく活動に加え、不法投棄させない環境づくりの実現は欠かすことができません。そして、阿武隈川の清流を下流域の住民に送り、河川の美しい景観を後世に伝えるために、今後とも河川的环境保全を推進していきます。

●未来へのメッセージ

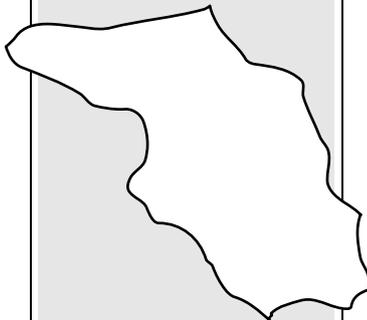
河川の風景や河川の水が汚いと感じることがなくなったとき、人は知らず知らずの内に河川を汚すことに疑問を抱かなくなってしまいます。そのためには、水に親しむという「親水」機能を持った河川を保全していくことが不可欠となります。日常的な河川とのふれあいの場を創出することによって、人と水の対話が生まれ、河川に対する市民意識の変化にもつながっていきます。そうした意識の変化によって河川への不法投棄の減少や河川浄化へとつながり、また、河川を含めた自然を慈しむ心が育まれていくのではないのでしょうか。

白河市が今後目指すべき良好な河川と人との関わり方を達成するためには、国や県、各種団体等の協力を得て、「親水」を市民に浸透させ、河川に対しさらに一層関心を持ってもらうことが重要となります。加えて、引き続き住民啓発の強化を図り、水質及び環境保全に努め、水と緑豊かな生活環境を創造していかなければならないと考えています。

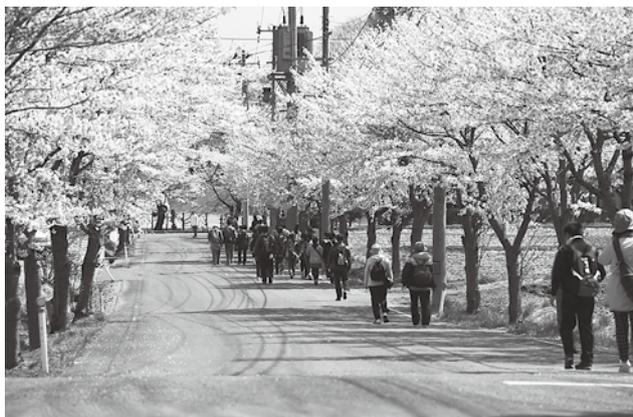
泉崎村



泉崎村長
久保木 正大



面積 35.40km²
人口 6,548人
(H26・9・1 現在)



▲いずみざき桜ウォーク

●泉崎村と阿武隈川

泉崎村を流れる阿武隈川は、南端に隣接する白河市との境界を東流しています。この地域は、古代より白河郡役所が造営されるなど要衝地として開拓が進んでおり、とりわけ阿武隈川が形成してきた肥沃な土地には今も豊かな田園風景が広がっています。一方で交通については、阿武隈川と併行するかのようには県道白河母畑線が走り村北部を走る国道4号線を県道塙泉崎線が繋いでおります。この交通利便性は泉崎村最大の特徴であり、現代において多くの企業が立地する産業進展の基幹を成しています。

阿武隈川は源流より仙台平野へと南北に流れ、福島県中通り地方の繁栄の源となるイメージが強い河川ですが、白河市より中島村までの一部東流する区間にあたる泉崎村においては、東西交通網の発展根拠であり、後に大動脈となる南北の交通網をより有効に生かすことのできる土壌を築いてくれた正に至宝の大河川と言っても過言ではありません。

●取り組みの現状

この阿武隈川の水質汚濁防止に努めるべく、泉崎村ではこれまで農業集落排水事業に積極的に取り組んで参りました。昭和58年度から平成24年度までに7地区に下水道処理施設を建設し、昭和60年度にコミュニティプラント整備事業により1地区を施工整備しました。これらの取り組みにより本村の生活排水処理率は93.7%まで上がってきております。また、工業排水については、企業と積極的に公害防止協定を締結し、水質の定期的な検査を実施しております。

その他の取り組みとして、河川へのゴミ・汚水等の不法投棄を防止するために巡視するとともに、全村民一丸となって実施する泉崎村統一クリーンアップ作戦により堤体の草刈りや空き缶拾い等を年3回実施しております。

●今後の課題

泉崎村には阿武隈川の支流として、村の中央を流れる泉川があります。そして泉川の支流として神川、中野川があり、どれも古くより地域と密接な関係を保ち農業や生活両面に渡って大きな役割を担ってきました。泉川については河川改修を早期に着手したことにより、以降洪水等の被害はなくなり治水環境が向上しましたが、農業集落排水事業の進捗状況により一時的に水質汚濁などの環境悪化が

ありました。近年、水質については浄化されてきておりますが、まだ十分とは言えない状況にあります。

今後は、下水道処理区域内の水洗化率向上のため加入推進と維持管理体制を確率するとともに下水道未整備散在集落の循環型社会形成推進地域計画によって生活排水処理率100%を目指し、快適な住環境を築いていきたいと思っております。



▲泉崎を流れる阿武隈川

●未来へのメッセージ

泉崎村は、総面積35.4km²のうち田畑の面積が約4割を占めています。言い換えると、この豊かな環境の土台を形成してきたのは、阿武隈川を代表とした各河川とすることができます。このことは、原始・古代の貴重な文化財が河川流域に存在していることが証明するように、先人より受け継がれてきた歴史であり文化であります。

現代を生きる私たちは、先人より受け継がれてきた様々な歴史や文化そして自然を後世に守り伝えていく義務を背負っています。その責務を果たすため、村民の理解と協力のもとに自然環境との調和を図り、秩序ある土地利用を推進していかなければなりません。

阿武隈川サミットが20周年を迎える今年、奇しくも泉崎村は第5次振興計画を策定遂行する年になりました。利水・治水はもとより様々な施策について、長期的な展望に立ち各地域における自然・歴史・文化など諸条件に配慮し、快適な生活環境の確保と産業の均衡のとれた振興を目指していききたいと思います。



▲三世代で農業を営む家族



▲村のシンボル霊峰鳥峠と田園風景